

『トリスタン』を読む

新倉 俊一

- 1) トリスタン物語群の成立
- 2) 第1章 トリスタンの少年時代
- 3) 第2章 イズーとの結縁
- 4) 物語のあらすじ
- 5) 参考文献、作者プロフィール
- 6) 付記

1) トリスタン物語群の成立

12世紀のフランス語で書かれたトリスタン物語は、断片が残されているだけか（ベルール、トマ）、あるいは散逸したため（クレチアン・ド・トロワ自身が『クリジェス』の冒頭で自作として挙げた『マルク王と金髪のイズー』、『狐物語第二枝篇』冒頭で言及されたラ・シエーヴル某の『トリスタン』）、物語の起源や生成を論じるのは極めて難しい。

ベルールの物語で二度（1267行と1789行）、《Estoire》「元の話／ものの本」が出てくることもあって、12世紀の中葉、ひとりの天才的な作者の手で、いまは失われた《原トリスタン物語》が作られ、同じ世紀のフランスとドイツの現存トリスタン物語はすべてこれから派生し、ドイツのアイルハルト作がこれにかなり忠実であろう、とする仮説が今世紀初めに提唱された。J. ベディエが唱え、G. ショパーレルが補強した《原トリスタン物語》説は、現在は以前ほどの強い説得力をもたない。《原トリスタン物語》の存在を否定しないまでも、ベルール、トマ、セルカモンらが示唆するように、すでに12世紀の前半以来、さまざまな口誦または書かれた伝承が存在していたことから、これだけを現存作品

の唯一の源泉とみなすわけにはゆくまい。

トリスタンはピクト人（スコットランド北部の部族）の名前、金髪のイーズはアイルランド人の名前に由来し、またマルク王は名前が「馬」を意味するケルト語で、活動の舞台がコーンウォールやウェールズにあることから、この伝説がスコットランドに生まれ、ケルト言語文化圏を南下しながら発展し、さらには同じくケルト言語文化圏であった、フランスのブルターニュにも移行し、トリスタンが名前に牽かれて結婚する、白い手のイーズの話が付け加わったとする説が有力だ（ただし、コーンウォール起源説もある）。10世紀に存在が確認できるアイルランドの駆け落ち物語『ディアミッドとグライーネ』と構造的に相似することから、とりわけアイルランドの影響を重視する見解もある。

現存する作品群を、《俗伝本（流布本）》系統と《宮廷本（騎士道物語本）》系統に分類するのが通例だ。前者は、伝説の本来の姿に（仮説の信奉者ならば《原トリスタン物語》に）近いと思われる作品、事をもって事を語らしめ、注釈や心理分析の極端に少ない、粗削りな叙事詩的な作品を指す——ベルールの物語、アイルハルトの物語、『トリスタン伴狂』ベルン本。後者は、この荒々しい危険な物語を、当時の宮廷社会で流行していたクルトワ的[宮廷風]騎士道物語のコンセプトに合わせて解釈し直した作品、事の驚異よりは恋愛心理の揺らぎと屈折にこだわる抒情詩的な作品を指す——トマの物語、その翻訳であるロベルトの『サガ』、華麗な翻案であるゴットフリートの物語、『トリスタン伴狂』オクスフォード本。

クルトワ的抒情詩や騎士道物語世界では、美しく若々しく華やかな貴婦人に若い騎士が恋をするが、その恋が直ちに成就することはない。たとえ貴婦人が好意を抱いていても、その彼を簡単に受け入れることはありえない。若者は、戦闘あるいは実戦同様の騎馬槍試合でめざましい働きを見せ、また礼儀正しく[クルトワ的に]奉仕することで、恋によって自分が向上した実績を明らかにすることで、ようやく貴婦人の愛を獲得できる。一目惚れで安易に燃え上がる恋、まわりの注目を浴びる不信心

な恋、はしたない振舞いなどは論外だ。宮廷社会でもてはやされた——現実に実践されたわけでもなかろうが——、結婚の制度に縛られない《fin'amors》[至純(精美)の愛]とは、不倫の愛、姦通愛なのであった。

ところが、トリスタンとイズーを結びつけたのは恋心ではない。船上でふたりが誤って飲んだ媚薬酒のせいだ。本来これは、敵対関係にあった国コーンウォールの、しかもトリスタンの伯父で、年齢離れたマルク王に嫁ぐ娘イズーのために、夫婦生活の円満を願って、アイルランド王妃が調合し、侍女ブランガンに託したものであった。その効力は期限つきではあるが、飲んだ者たちは電撃的に、運命的に愛し合うようになり、しかも愛が中断されると高熱を発し、やがて死にいたるといふ、その中に愛と死を封じこめた激烈な飲み物である。彼らを襲って捕えた《passion》とは、文字通り「情熱」であり「受難」であった。彼らには、上品なクルトワ的愛の手続きを踏む余裕など初めからない。秘密をまわりに気取らせない余裕もありはしない。盲目的な愛、本能に忠実な性愛、それも自分たちが望んで掴んだのではない愛。火炙りの刑を逃れて暮らすモロワの森で、彼らが偶然に隠者オグランの庵を訪ねたときのこと、悔悛を迫る隠者に向かって、金髪のイズーはトリスタン同様にこう訴える——「隠者さま、全能の神にかけて、／彼が私を愛し、また私が彼を愛するのは、／ひたすら、ふたりが飲んだ秘薬の仕業、／それは災難だったのです」。彼らに罪障感はない。語り手ベルールは、神に対しても恋人たちを免責する。3年の（アイルハルトの場合は4年の）期限が到来して、彼らが盲目的な愛から覚醒し、イズーはマルク王のもとに戻ることで、トリスタンは国外に退去することで社会復帰はかなうが、彼らの愛が終わったわけではなく、最終的には死によって愛は完結する。

このような情熱恋愛は、クルトワ的恋愛を理想とする宮廷社会にとって、野蛮かつ危険きわまりないものであった。クレチアン・ド・トロワは反トリスタンの『クリジェス』の中で、女主人公にイズーを厳しく批判させる。トマは、伝説の骨子である媚薬酒を排除するわけにはゆか

ないが、その効用は主人公たちの心に芽生えた恋心を顕在化させるだけにとどめ、したがって有効期限などはつけない。ベルールの物語では死の危険に絶えずさらされるモロワの森の生活も、トマの物語では「蜜月旅行」のように甘美だ。そのかわり恋人たちは、別れたあとの相手の伴侶に嫉妬する。トマの繊細な心理分析は見事だ。情熱恋愛を宮廷風恋愛のコンセプトで解釈し直す試み自体は、構造的に破綻を免れないが、幸い残された「恋人たちの最期」の部分では、死によってのみ完結する愛の美しさを描いて間然するところがない。

ベルールもトマも、いわば断片だけが残されたに過ぎないが、文学テクストとして比類のない迫力と美しさを現在もなおもち続けている。しかし写本の数からおして、中世で広く歓迎されたとは思えない。俗伝本は勿論だが、宮廷本もまた宮廷社会の好みに合わなかったのであろう。とはいえ、トリスタン伝説そのものは、13世紀以降の中世で大人気を博した。そしてそれは、龐大な《散文トリスタン》シリーズのおかげだ。繰り返し焼き直され、数多くの写本に残された散文トリスタン物語は、同じ13世紀に大流行した散文の円卓騎士物語、とりわけ、アーサー王の王妃グニエーヴルの恋人、屈指の武勇を誇る美男騎士ランスロを中核とした物語との、奇妙なアマルガムであった。これを《俗伝本》系統に分類する研究者もいるが、《俗伝本》でも《宮廷本》でもない別種として扱うほうが妥当であろう。本来アーサー王麾下の円卓騎士でもなく、またクルトワ的恋愛の咲き誇るアーサー王の宮廷では異質で危険な愛の具現者であるはずのトリスタンが、いわばその中に取りこまれる形で、毒の弱められる存在となるのだ。勿論彼が常に受動的な立場で終始したわけではない。トリスタンのような肉親関係にはないが、ランスロもまた王と王妃との三角関係に身を置いていた。いくつかの挿話で、彼はトリスタンとそっくりな状況に追い込まれる。

最後に、中世のトリスタン物語は題名通り、男中心の、トリスタンの物語であり、これがトリスタンとイズーという男女の物語になるには、受容する側の意識の変革が必要であったことを付け加えておく。

2) 第1章 トリスタンの少年時代

トリスタンの幼少時代について、ベディエは、プロローグに続く最初の章、「トリスタンの少年時代」で紹介する。以下にまず、そのトリスタン出生までの経緯を要約してみよう――

コーンウォール王マルクが敵に攻められたのを聞き、ローヌア [ローノワ] 王リヴァランは、海を渡って救援に馳せつけ、「あたかも臣下でもあるかのように、忠誠をつくして仕える」(ベディエ、10頁)。感激したマルク王は、妹のブランシュフルール、このリヴァランの熱愛する美女を与えて、その義に酬いた。リヴァランは、タンタジェル [ティンタジェル] の御堂で姫を妻に娶った。しかしながら、間もなく仇敵のモルガン侯がローヌアの地に侵入したのを聞き、みごもっていたブランシュフルールを伴って帰国の途につくが、カノエル城の前に船を着け、軍将《義人ロアール》の手に妃を託して決戦に赴く。異国の地で帰還を待ち侘びるブランシュフルールに、リヴァランの死が伝えられる。絶望した彼女は、その四日後に男の子を産み落とすと、「悲しみにつまれてこの世に生まれてきたのだから、そちの名はトリスタン《悲しみの子》とよばれるがよい」(ベディエ、12頁) と言い、くちづけをすませるとそのまま死んでいった。

ベディエは「編者ノート」の中で、「わたしの物語の第1章(トリスタンの少年時代)はいろいろの詩から、しかし主としてトマの作品の外国語訳本でうかがいえる部分から、その梗概をえている」(ベディエ、284頁)と出典を明らかにする。ところで、トマの「外国語訳本」といえば――この訳は必ずしも適切ではない、せめて「外国語版本(ヴェルシオン)」とすべきか――、誰しもドイツの詩人、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの作品 [ゴットフリート] と、ノルウェーの修道僧、ロベルトの作品 [『サガ』] を考えるのが定石だが、奇妙なことに、双方ともベディエの《梗概》と一致しない点が少なくないのである。

そもそもゴットフリートによれば、リヴァランがコーンウォール王マルクのもとに馳せ参じたのは、救援のためではまったくない。宿敵マルガンとの間に休戦協定を結んだ後、当時名君としての声望の高かったマルク王を敬慕し、もって騎士の範とすべく訪れたのである。すなわち、リヴァリーン〔以下、リヴァラン〕は、「マルケ〔以下、マルク〕王と一緒に一年間を過ごし、彼の薫陶を受けて、徳操を高め、新しい騎士道を学び、自分の礼儀作法に一層みがきをかけようと思ったのである」（ゴットフリート、11頁）。卓越した人物に兄事もしくは師事することで自己完成を希求する、これは典型的な宮廷風騎士道物語の若き主人公の発想なのである。一方『サガ』によれば、この勇猛の貴公子、もっぱらカネラングレス *Kanelangres* の名で呼ばれる人物——ゴットフリートも、あとから、「リヴァリーンのまたの名、カネーレングレス」と補足する——は、マルク王個人というよりは、むしろ彼の治める王国〔イギリスおよびコーンウォール〕と住民たちの目覚ましい富と豪華、暮らしぶりの洗練と気品、華やかな武勇と武功に憧れていたようだが、彼の訪問は救援のためでないことに変わりはない。いずれにせよ、栄光に包まれたマルク王は、異国の王侯騎士の救援などを必要としてはいなかった。少なくとも、この時そのような状況に追い込まれてはいなかったのである。

次に、この異国の騎士と、王の妹のブランシュフルールの結縁についてはどうか。確かに、ふたりは一目で恋におちた。ベディエは、しかし、その経緯を簡略化し過ぎている。実は、後述するとおり、ふたりの愛と死は、彼らの愛の結実であるトリスタンと金髪のイブーの愛と死と、一種の円環構造をなしているのであって、このような簡略化は望ましくないばかりか、すでにベディエは冒頭部分から——あえて言うが——正確とは言えぬ簡略化を強行しているのだ。ふたりは出会いのその瞬間から、互いに激しく相手に牽かれるが、それぞれが片思いだと信じて苦しみ悩む。その心の葛藤の詳細な記述は、異なった文化圏の荒々しい衝撃的な伝説を、宮廷風騎士道物語の枠内に取り込もうとしたトマの戦略

が明白に察知できる箇所ではある。前評判に違わず騎馬槍試合に傑出した腕前を發揮し、かくも雄々しくも美しいリヴァランを目にして、心に恋の炎を点ぜられたブランシュフルールは、相手の魅力はもしかして「一種の妖術」、「魔法」（ゴットフリート、18～19頁）のなせる業かと疑う。『サガ』におけるマルク王の妹——「彼女に匹敵する薔薇はこの世になかった」と讃えられたブレンシンビル、のちにブランシュフルールの名でも呼ばれる——は、もっと直截に自問する——

「これほど陰険に私を苛むこの苦痛はどこから来ているの？ 私を治す薬をくれるほどの名医はどこかにいないの？ 私の中にこれほど強い毒を注ぐのが、今日の昼間の暑さということはほとんどありえない。考えたこともなかった、この病いがこれほどの癒しがたい苦しみを引き起こすとは、だって、体が火のような熱さで震え、冷えては汗をかくのだから」（『サガ』、6章）

これははるか後年に、彼女の息子と異国の王女が、コーンウォールに向かう船上で、暑い昼下がりに薬酒を誤って飲んで思い知らされる、あの抗しがたい力、「毒」の予兆ではあるまいか。

いずれにせよ、ふたりが愛に結ばれるのは、マルク王の差し金ではない。ゴットフリートによれば、敵の一人である王が進攻してきたため、マルク王はこれを撃退する。マルク王の宮廷に留まっていた——繰り返すが、そのために来たのではない——リヴァランは参戦して脇腹に重傷を負い、その彼をブランシュフルールが見舞いに訪れ、愛のこもった口づけをしたからである——

その口づけは彼を喜ばせ、彼に力を与えたので、彼は見事なこの女人を、自分の半死半生の体にぴったりとはげしく押しつけ、二人が思いを遂げたのは、それから間もなくのことであった。こうしてこのいとも麗しい女人は、彼のために子供をみごもった。（ゴットフリート、23頁）

すなわち、兄マルク王の関知しない状況で、妹は異国の騎士とひそか

に結ばれ、かつみごもったのである。無論、このあとで兄マルク王がふたりの仲を公認し、妹を与えて「その義にむくいた」ならば、ベディエの筋骨きどおりになるであろう。だが、事實はどうか。

仇敵モルガンの背信行為を聞き、リヴァランが討伐のため帰国を決意すると、ブランシュフルールは激しく嘆き、恋人から致命的な三つの悩みを受けたと言う――

「その一つは、わたしが子供をみごもっていることで（・・・）、次の悩みはもっと大きくございます。わたしの主君である兄が己が恥ともなるような不祥事が妹の身に起こったことを知ったなら、きっとわたしを破滅させ、屈辱的な仕方であたしをあやめるように命じるに違いありません。けれども第三の悩みは最も大きいもので、それからみれば、死ぬ方がまだどんなにましか知れません（・・・）万一にも兄がわたしを生かしておくようなことがあったとすれば、兄はわたしを勘当して富も名誉もはぎ取ってしまうにきまっています（・・・）それのみか、わたしはれっきとした父親のある子供を、当の父親の助けなしに育てなければならぬのです（・・・）」（ゴットフリート、25頁）

いかにやんごとない出自とはいえ、この国では家臣もしくは食客に過ぎない異国人との恋愛沙汰が兄王に認知されるはずのないことを、妹の王女は、当然のことながら明晰に認識している。リヴァランもまた、結婚の許可をマルク王に求めるほど、世間知らずでも楽道家でもない。このままこの国に残るか、それとも一緒に国を出るかのいずれかを選ばれよと提案し、相手が後者を選ぶと答えると、彼はこう言うのであった――

「では、姫よ、わたしの言うとおりにしなさい。今夜乗船しますから、わたしがいとま乞いをしている間に、あなたは先にこっそり船に乗り込んで、わたしが乗船した時には、ちゃんとわたしの伴の者のところにいるようにして下さい。そうなさい。それよりほかに手だてはありません」（ゴットフリート、27頁）

その通り、こうするよりほかに手立てのあるはずがない。リヴァランは抜け目なく、マルク王のところへ行き——勿論、ブランシュフルールとの情事はおくびにも出さず——、円満に別れの挨拶を交わすのであるが、基本的に彼とその恋人の行為が《駆け落ち》であることに変わりはあるまい。そして、トリスタンとイズーの物語は、その原型からして《駆け落ち》物語であったことを、ここで想起したい。後年トリスタンが恋人とそうするよりはるか以前に、ほかならぬ彼の両親が、恋と命をまっとうするために駆け落ちしたことが、どうして象徴的な意味を持たずにいられようか。

駆け落ちに成功して帰国したリヴァランは、忠義者ルーアル〔ロアール〕の勧めにしたがって、故郷の——地名は明示されていないが、マルク王の居城のあるティンタジェルであるはずがない——教会で正式の結婚式を挙げ、この忠臣に後事を託して戦いに赴く。そして、そのあとの彼の死、妻の絶望と出産の経緯については、ベディエの梗概と矛盾するところはない。ただし、生まれた子をトリスタンと命名するのは、臨終の床の母親ではなく、敵の目を欺くべく、嬰兒を自分の子として育てることにしたロアールであった（ゴットフリート、34頁）。因みに、リヴァランの死を聞いて、絶望したブランシュフルールが泣きもせず、「驚きの叫びも、嘆きの言葉も一つもたてないで、ただ手足には力がなくなり、そのままむなしくくずれおれてゆくのみ」（ベディエ、11頁）については、ゴットフリートの伝えることと一致するのであるから、子供を産み落とした後、わざわざ子供の命名を含む長せりふを母親の口から吐かせるまでもなかった。

『サガ』ではどうであるのか。異国の騎士カネラングレスと、マルク王の妹と結ばれ、ブレンシンビルが子供をみごもる経緯は、ゴットフリートの場合と大差ない。ただし、その前に作者は、マルク王が周囲の者から聞かされ、異国の客人が妹に抱く思慕の念に気づいていて、正式に申し出があれば、認める意向であったようだと述べているが（『サガ』、10章）、いざ突発的事態を迎えたブレンシンビルは、そのような

樂觀に与するどころか、兄王に知られば、死の危険を冒すことになろうと指摘する。カネラングレスもまた、ゴットフリートの場合と同じ二者択一を恋人に提案し、この国を脱出してブルターニュを目指すことでふたりは合意する。そして、王の妹が同行することには一言も触れず、カネラングレスがマルク王に暇乞いをし、事実上の《駆け落ち》を執行して、故国で正式の結婚式を挙げるのであった。名前こそ明示されていないが、信頼できる重臣に後事を託したあとの経緯については、ゴットフリートの場合と、そしてベディエの梗概とも大差はない。ただし、夫の死を聞いた妻の悲しみぶりはうって変わって激しく、「自殺を試みた」ほどであり、長い嘆きの言葉を連ねる。そのなかで、次の言葉に注目したい――

「あの人が死んだいま、どうして生きてゆくのか？ わたしの喜びが埋められた以上、どうして慰め励ましが見つけられる？ わたしたちは一緒に死ななければ。あの人がわたしのところに来れない以上、わたしが死を渡りきるほかはない、だって死がこの心の臓で脈打っているのだから」(『サガ』、15章)

はるか後年、トリスタンに死が刻々迫る状況で、トマが金髪のイズーに述べさせる言葉を、これは彷彿させるではないか。ここにも、ふたつの愛と死の物語の円環構造が見て取れるのである。いずれにせよ、『サガ』の場合も、息子の命名は母親によるものではなく、親代わりを務める重臣であった。

こうしてみると、「主としてトマの外国語訳本でうかがいえる部分から」得ていると称するベディエの梗概が、かなり恣意的なものであることが納得できたであろう。中世の現実とも、またこの物語の構造とも照応しない《改変》が施されたと考えざるを得ないのである。恣意的選択をためらわぬベディエであるから、トマの対極にあるヴェルシオンを緋い混ぜた可能性もあろう。そこで、いわゆる《流布(俗)本》系統の場

合、これまでの事件がどうであったのか、それを調べてみる必要がある。現存ベール作品は、トリスタンの幼少時代を全く残していないため、アイルハルトによって探ることにする。

アイルハルトによれば、驚くなかれ、これはベディエの要約の通り、ローノワの王リヴァランは、侵入した強敵に苦しむマルク王を救援すべく——彼を以て王者もしくは戦士の範とするためではなく——、コーンウォールに馳せつけ、自分の軍隊と共に、「まさに臣下でもあるかのように仕えた」。しかし作者は、その直後にこう付け加える——

彼がすべてこのことをなしたのは、／王の妹を妻にしたいと／望んだがためであった。／彼は命を賭けて／相手が自分に身を任せるようにした。／貴婦人はその彼に大いに愛着したため、／戦いが終わると、／この王と駆け落ちした。／彼女は自分の王国を棄てた。／その名をブランシュフルールといった。／船に乗り込む前に、／この貴婦人はみごもっていた。／彼らが大海原に出ると、／彼女は大いに苦しんで／死んだのである。／子供がその心痛の原因であった。／女の遺体を切り開いて、／息子が取り出された。／王はこれを故国に連れて行った。／息子はトリストラン [トリスタン] と呼ばれた。(アイルハルト、95～102行)

恋人たちの行為が《駆け落ち》であることを、このテキストがいつそう明示的に述べていることに注目したい。寛大な親権者もしくは主権者として、妹と家来の結婚を歓迎したはずがないのである。なお、「子供が彼女の（死をもたらす）心痛の原因であった」という記述は、いかにも説明不足であり、夫の不慮の死のもたらす悲しみこそ、出産と若妻の死を招いたとする《騎士道本》の設定のほうが、話としては説得力に富み、また哀切であることは確かだ。しかしながら、異国の男と駆け落ちしたことにより、あたかも故国の神の罰を蒙ったかのごとく、大海原で突如避けがたい死に見舞われたこと、そして命なき母胎から一種の帝王切開によって、許されない愛の結実が摘出されたことに、極めて荒々しい神話的象徴を見出さずにはいられない。もとよりこの子は母親の腹を

食い破って生まれた鬼子ではまったくないが、その生誕が母の死と不可分、その死が恋人の死と不可分であることで完結する不吉な宿命を思うと、アイルハルトの話のほうがより平仄の合うように私には思えてならない。いずれにせよ、そもそもの発端からして、所謂《騎士道本》系統と《流布（俗）本》系統とが、ラディカルな差異を見せていること、そしてベディエの梗概がそのどちらにも忠実ではないことを、まず確認しておきたい。

さて、生まれた子供を、どのように育て上げるのか。ベディエによれば、次のようであった――

義人口アールがこの子を引き取り、勝者のモルガン侯に殺されぬよう、トリスタンを実子と偽って養育し、7年後には「侍女たち〔彼の妻を含むから、「女たち」と訳すべき〕からひきはなし」、これを賢明なる指南役で忠誠の従士のゴルヴナル〔以下、ゴヴェルナルで統一〕に委託した。ゴヴェルナルは少年に、「およそ公達たるものの必ず心得ておかねばならぬ、文武の道」を教えるが、それには「歌謡のうたいかた、豎琴の弾きかた、狩猟のしかた」（ベディエ、12～13頁）も含まれていた。亡き両親の「青春と美しさを甦らせている」トリスタンを見て、ロアールは大いに喜ぶが、ある日、ノルウェの商人どもがトリスタンを船上におびき寄せて拉致する。ところが、海が荒れ狂ったために、彼らは「子供を許す（正しくは、解放する）誓いをたてて、小舟をしたて、かなたの岸辺に送りとどけた」（ベディエ、14頁）。異郷に運ばれて悲しむトリスタンの目の前で、鹿狩りが展開する。仕留めた獲物の頭を切り落とそうとする獵人頭を制止して、トリスタンは見事な解体の技を披露する。彼は用心深く素性を語らぬが、誘われるままにティンタジェル之城へ行く。

マルク王は獵人頭から話を聞いて感嘆するが、それ以上にこの素性の知れぬ少年に深く心牽かれるものを感じる。食事の後、トリスタンは乞われるままに、楽器を操り美しい歌を披露した。感動した王は、トリス

タンをこの地に引き留めるのであった。王と少年との心の絆はいよいよ親密になり、騎士たちもみな異国の少年を愛した。とりわけ宮廷長リダンのディナスはそうであった。後年のほとんど孤立した状況を思うと、夢のように心地よい宮廷生活ではあったが、「父ロアールを失い、師のゴルヴナル〔ゴヴェルナル〕も失い、ローヌアの地を離れた悲しみを、どうしても忘れることができなかつた」（ベディエ、20頁）。

3年後、トリスタン探索の旅に出ていた義人ロアールが、コーンウォールにたどり着く。トリスタンとの再会のかなった彼は、「さきにマルク王が、婚約の贈物としてブランシュフルールにあたえた柘榴石の指輪を王に示して」（ベディエ、21頁）、少年の身元を証明する。トリスタンは、伯父から騎士の武具と軍船を借り受け、ロアールと共に海を渡り、リヴァランの弑逆者モルガンを滅ぼし、旧領を回復する。彼は部下の将士の前で、「孤児をはぐくみ、この流浪の子を養育したもうた」（ベディエ、22頁）ロアールとマルク王の名を挙げ、その恩義に報いるため、高位の者に備わる二つの持ち物——領地と肉身——のうち、前者をロアールに譲り、後者をマルク王に捧げると宣言する。そして、ゴヴェルナルだけを連れて、コーンウォールに戻ることにした。

例のごとく、これをゴットフリートおよび『サガ』によって検証してみよう。前述のように、母親からではなく父親役を自分に課したロアールから、「悲しみ」の子と名づけられたのではあるが、トリスタンの教育については、ほぼベディエの伝えるとおりである。ただし、これは教養人たる宮廷風騎士物語の作者にふさわしい発想ではあるが、子供が7歳を迎えると、養父はこれを愛情深い養母〔ほかならぬ彼の妻〕から引き離し、「一人の聡明な人物〔ゴヴェルナル〕にゆだねた。そして外国語を学ばせるために、この人をつけて直ちに外国へやった。しかしこれはまた彼に、早速書物による学習を始めさせ、どんな学習にもまして、この学習に専念させるためであった」（ゴットフリート、35頁）。外国留学による外国語学習と書物の学習、優れた教師の指導——これは現代

においてもなお通用する教育である。因みに、『サガ』もそのことに言及して、少年に「書物の知識」を授け、「根幹的な七術 [中世の学問教育の根幹をなす自由学芸、三学四科]」を教え、そして「あらゆる種類の言語」を習得させたと述べる。ただし、ゴヴェルナルについては言及されておらず、教育を担当したのは養父自身であったようにだが。ベディエは、この書物による学習と外国語の習得を、少年トリスタンの教育カリキュラムから削除している。ペルール作品では、トリスタンが読み書きできないと思われる重要なエピソード [隠者オグランによるマルク王宛て書簡の代筆] が、彼の頭にあったためであろうか。アイルハルト作品にも、この種の知的教育への言及はない。学校教育的訓練が少年トリスタンに不可欠だとは思えぬから、ベディエの削除は特に異とするには当たるまい。

ノルウェ商人によるトリスタン拉致は、ほぼゴットフリートの話に沿っている。ゴヴェルナルと一緒にいて、途中で小舟で流されたくだりが省略されているが、それは大した問題ではあるまい。なお、拉致のきっかけとしてゴットフリートは、異国の船に乗り込んだトリスタンがチェスに夢中になり過ぎたことを伝えているが、『サガ』によれば、話はずっと複雑だ。すなわち、あくまでトリスタンを実子として育てるが、主君の遺児への敬意からこれを特別扱いする父親に、事情を知らぬ息子たちが立腹し、腹いせに事件を仕組んだというものである。カデンツァ過剰までに尾緒をつけたがるゴットフリートに比べ、『サガ』はトマへの忠実度が高いと言われるから、トマ作品の失われた部分はこのようであったかも知れない。いずれにせよ、これも特に問題とするに及ばないであろう。

トリスタンが傑出した未来の騎士にふさわしい素養を披露する、あの狩猟の獲物解体の後、互いに血の結びつきを知らぬまま、トリスタンとマルク王の対面が実現するが、その情景を語り部ベディエは次のように伝える――

みなの人衆、マルク王の心をときめかせ、その内部で言葉をかけたもの

こそ、すなわち血縁の絆であり、かつて彼が妹の美女ブランシュフルールに注いだ、愛情そのものだったのだ。(ベディエ、18頁)。

ベディエはおそらく、ゴットフリートの次の記述に想を得たものではないかと思う――

トリスタンは王を初めて見たとき、一目で好きになった。彼の心は他のすべての人々から王を選び取った。というのは、彼は王と血がつながっていたからで、本能の声が彼を引き付けたのである。(ゴットフリート、54頁)

内面の促しを感じとったのが、ベディエによれば、トリスタンではなくマルク王になっている。この主体の《すり替え》は、しかし、偶然や錯覚ではあるまい。さきに引用した「(リヴァランに) 妹のブランシュフルールを与えて、その義にむくいた」という強引な設定に辻褄を合わせるための戦略であったに違いない。《駆け落ち》した妹に愛情を抱き続けることは、もとより不可能ではないものの、マルク王をあまりにも美化するきらいあり、ここでは少年を主体に選んだ中世の語り部に軍配を挙げるべきであろう。因みに、『サガ』は、そのような内面の促しについて何ら言及しない。

トリスタン探索の旅に心身の苦しみをなめつくしたロアールが、伯父と甥の血縁を証明するのに、決定的な役割を演じたのは、中世のいくつもの物語にそうであったように、《指輪》であったことは前述のとおり。ただし、それは父王からいまわの際に譲られたものを、マルクが一かかなる理由かは説明されていないが、ありもしない婚約のためであるはずがない――妹に与えたものであった(ゴットフリート、73頁)。

『サガ』の記述はもう少し丁寧なものである――

彼 [ロアール] はそこで、かつてマルク王の父が持っていて、マルク王が立派な愛情で愛していたために、妹に与えた宝石で飾られた金の指輪を見せた。ブレンシビルがいまわの際に、死の否定できぬ証拠とし

て、これを兄の王に渡すように頼んだ経緯を、彼はマルク王に語った。
（『サガ』、24章）

なお、これは大したことではあるまいが、ゴットフリートの言う「一つの指輪」、『サガ』の言う「宝石で飾られた指輪」が、ベディエによって「柘榴石 *escarboucle*」と特定化されていることを、つけ加えておきたい。

マルク王の宮廷に暖かく受け入れられたトリスタンに、養父は勧告する――

「そなたの伯父君に、そなたをここで騎士に取り立て、そなたの帰国を援助して下さるよう、お願いしなさい。そなたはもうこれからは、自分のものは自分で立派に支配することができるのだから」（ゴットフリート、75頁）

そう、まずは権力者の後ろ盾で騎士に取り立ててもらおうこと。戦士の中のエリート存在、騎士に叙任されることは、トリスタンのような卓越した資質と素養の持ち主にとって、極めて当然の成り行きであった。ゴットフリートはこれについて、同時代およびごく近い物語作者や詩人を引き合いに出し、意気揚々と長広舌を振るう（8章 トリスタンの刀礼）。『サガ』もこれほど饒舌ではないが、叙任の経緯を語ることに変わりはない（24章）。これに対し、ベディエの物語には、この重要なイニシエーションへの言及がないようである。あるのは、「伯父から騎士の物の具を借りうけ（・・・）」という記述のみ。しかし、これは、原文――*ayant reçu de son oncle les armes de chevalerie* 「伯父から騎士の武具甲冑を受け取り [伯父によって騎士に叙任され]」の、ほとんど誤訳のせいである。いずれにせよ、この騎士叙任によって、トリスタンは一人前の身となった。亡父の復讐のために帰国の許しと援助を乞うトリスタンに、マルク王は援助を快諾し、さらに甥の取るべき行動に決定的な影響をもたらすことを明言する――

「そして神様のお恵みにより、そなたが故郷で必要な手配をし、問題を有利に、且つまた名誉を傷つけぬよう、片付けることができたなら、帰って来るんだよ（・・・）さあ、このとおりそなたの手を握って、わたしは次のことをそなたに誓い、且つ実行しよう。わたしは財産と領国をいつでもそなたと等分しよう。そして、もしもそなたが運よく、わたしより長生きするようなことになれば、すべてをそなたに与えよう。と申すのは、わたしはそなたのために生涯正妻は持たないつもりなのだ」（ゴットフリート、91頁）

すなわち、自分の跡継ぎ、王国の継承者として、トリスタンを認知する、という明確な宣言であった。そして、トリスタンは、亡父の復讐を遂げた後、父の旧領を恩人ロアールに譲ることを、故国の全宮廷を前に宣言した際、この王の言葉を引用している（ゴットフリート、99頁）。一方『サガ』には、叙任の際にトリスタンを励まし訓戒する王の言葉はあっても、王国の共有と将来の継承を約束する言葉は記していない。ただし、父の旧領を恩人のロアールに譲ることを宣言した際に、トリスタンはこう述べている――

「友よ、わたしは諸君の公正な主君であり、マルク王の甥である。彼には息子も、娘も、法定の後継者もない。従ってわたしは彼の唯一の法定後継者である。わたしはその彼のそばに戻り、出来る限り礼を尽くして奉仕したい。わたしは養父のロアルド [ロアール] に、その全収益と共にこの都を委ねる。そして彼の後は、その息子が保有するがよい」（『サガ』、25章）

マルク王自身の意志であるのか、トリスタンの判断であるのか、その差異は重大でありうるが、この血の絆に信頼を置いた――しかし、封建制度の現実と合致するとは限らない――約束もしくは見通しは、いささか手の込み過ぎた仕掛けではあるものの、トリスタンの栄光と、やがて彼が招く宮廷社会での孤立を十分に納得させるものだ。少なくともそれ

は、父の旧領を恩人ロアールに譲る、トリスタンの決断に弾みをつけるものではあった。これを論拠とする彼の演説は、ベディエ=トリスタンの言説——「貴族には二つの持ち物がある。門地と肉身がそれである（・・・）ロアールにはわたしの領土をお譲りする（・・・）マルク王にはこの肉身を捧げよう」（22頁）よりは、はるかに説得力に富むと言わねばなるまい。いずれにせよ、トリスタンは哀惜の涙を流す養父と家臣たちと別れて、ゴヴェルナルのみを伴ってコーンウォールに引き返した。

話は前後するが、亡父の仇敵モルガンに向かって、ゴットフリートのトリスタンが自分の素性を告げ、奪われた所領の返還を求めた際、議論は初めからかみ合わない。モルガンの主張は、若者の母親は父親と「故郷を出奔した」のであり、両者の結びつきは要するに「情事」に過ぎず、それから生まれた若者は「嫡出の子供ではなく、従って、采邑並びにそれを受ける権利を失ったのだ」とするものである。これに対し、トリスタンは真っ向から反論する——現に多くの身分の高い人々が彼に采邑受領者として忠誠の誓いを立てているが、その理由は「彼らは本当のことを、わたしの父リヴァリーン [リヴァラン] が死ぬ少し前にわたしの母を正妻にしていたことを、よく知っているのです。これが真実であることを、刃にかけて証明せよと仰せられるのなら、まこと、立派に証明致しましょう」（ゴットフリート、94～95頁）。『サガ』のトリスタンとモルガンとの間にも、同様な応酬があった。ただし、ゴットフリートのモルガンが若者の素性を疑わず、もっぱら「私生児」扱いにしたのに比べ、こちらのモルガンははるかに高圧的であった——「黙れ、がさつ者！ 無礼千万なやつだ、貴様は売女の倅よ、誰が貴様を生んだのか分からずに、父親について嘘を並べてるのだ」（『サガ』、24章）

リヴァランとブランシュフルールの結縁が、彼らに好意的ではない者たちにどのように受け取られていたか、このやりとりは雄弁に物語っているのではないか。

ところで、いわゆる《流布本》アイルハルトの物語では、トリスタンの教育はどうであったか。リヴァランの故国に向かう途中の船でブランシュフルールが死に、その遺体から取り出されたのであるから、トリスタン養育の主導権を握るのは、生きていた父リヴァランその人であった。彼は嬰兒を乳母に預ける。乳母は、この子が馬に乗れる日が来るまで育てるが、その後の戦士ならびに宮廷人教育は、《騎士道本》の場合と同様に、クルネヴァル〔ゴヴェルナル〕に委ねられる。この師匠は、しかし、戦闘技術の伝授ばかりではなく、「喜々として、／その腕と財産でもって貴婦人方に／熱心に奉仕するようと言う」（163～65行）のだから、端倪すべからざるものがある。十分な教育を受けた後、この師匠は逞しくなった弟子の、若き主君に「外国を知る」ことの重要性を説く。トリスタンは父王リヴァランに外国行きの許可を求めて、快諾を得た。ゴヴェルナルのほか、トリスタンは10名の同行者を伴って船に乗り、コーンウォールの地に降り立つが、身分は秘したままマルク王の宮廷に出向いて滞在を許される。宮廷長のリタンのティタン〔リダンのディナス〕の知遇を得て幸福な宮廷生活を送るが、やがてこの国は巨人ル・モロルトに脅かされる。トリスタンがその素性をマルク王に告げるのは、ようやく彼が巨人に挑戦する時のことでしかない。

以上概観したとおり、ベディエの第1章「トリスタンの少年時代」は、基本的に「トマの外国語訳本でうかがいえる部分から」再構成したものであるに違いないが、あまりにも恣意的な修正が施されていることが、解ってもらえたと思う。それにまた、彼が神話的予兆に富む導入部を簡略化し過ぎたという見解もまた、同感してもらえらると思う。

3) 第2章 イズーとの結縁

コーンウォールに戻ったトリスタンに、容易ならざる事態が待ち受けていた。例によって、ベディエの「2 アイルランドのモルオルト」にそって見てみよう。この王国とアイルランド王国とは久しく対立状態に

あった。前者は後者に貢物を献上する契約を結んでおり、これを怠る場合は、15歳の少年300人、少女300人を奴隷として差し出す義務を負っていたのである。この度、督促の使者として派遣されたのは、アイルランド王妃の兄、無敵の巨人騎士モルオルト〔以下、ル・モロルト〕であった。この恐るべき強者の無礼極まる口上に、居並ぶコーンウォールの諸侯は、意気地なくうなだれるばかりであった。しかしながら、我らの主人公は、ひとり敢然とこれに挑戦する。

サン・サンソンの小島で行われた激しい決闘は、人々の予想に反し、相手の頭蓋骨に刃毀れが残るほどの、痛撃を見舞ったトリスタンの勝利に帰す（故国に送り返され遺骸から抜き取られた剣の破片は、姪のイズーの手で「象牙の小筥」に納められ、イズー母娘のトリスタンへの憎しみが消えることはあるまい）。しかしながら、「毒を塗った槍の穂先」（ベディエ、31頁）に突き刺されたトリスタンもまた瀕死の床に伏す。最初のうちこそは救国の英雄と持て囃されたが、傷口から立ちのぼる悪臭に辟易して誰も近寄らなくなり、今や彼の枕辺に付き添うのは、マルク王、ゴヴェルナル、親友のリダンのディナスの3人のみ。浜辺の小屋で死の到来を待つばかりのトリスタンは、しかし、次のように伯父に懇願する――

「（・・・）この不思議に満ちた大海原を、わたってみたい。……供もつれず、たった一人でどこかの土地に運んでいかれたい！でも、どこの土地へだ？ それは自分にもわからない。けれど、それはわたしを癒してくれる人の見つかるところへ（・・・）」（同、32頁）

マルク王はついにその願いを聞き入れ、「櫂もなく帆もない小舟に」（同、32頁）、豎琴だけを乗せて海に流してやる。七日七夜の漂流のあと、小舟はル・モロルトの眠るウェクスフォードの港に着いた。金髪のイズーの医術によって蘇生したトリスタンは、「旅の楽手」（同、34頁）と称して素性を隠すが、40日たって青春の美がよみがえりはじめると、逃げ出してマルク王のもとに戻った。

これに続くのが、ベディエの「3 黄金の髪の美女を求めて」と題する章である。奇跡的な生還をなしとげたトリスタンに、マルク王の愛情はいやます一方だが、これに危機感を抱いたのが、重臣の四悪人——王の甥のアンドレ侯、ゲヌロン、ゴンドアヌ、デノアラン——であった。彼らはトリスタンを魔法使扱いにして、これを後継者にするなど論外と断じ、ほかの諸侯の大部分を味方につけたうえで、結婚して相続者をもうけたまえ、否とあらば反逆も辞せずと王に迫る。後代の絶対王制期と異なり、封建期の王権は脆弱で、王は重臣の意向に背くことはできない(カリスマ的な皇帝シャルルマーニュすら、『ロランの歌』の中で優柔不断な姿を露呈する)。

約束の期限の日、二羽の燕が窓から飛び込み、「絹よりも細くて、陽の光のように輝く一筋の女の髪の毛」(同、39頁)を王にもたらした。これはほとんど『かぐや姫』の難題であるが、マルク王は、この見事な黄金色の髪の持ち主でなければ結婚しないと言う。王に悪知恵を授けたとの疑いをかけられたトリスタンは、金髪のイズーを思い出して、探索の旅をかってでる。すなわち、商船を仕立てさせ、自分もまた100人の若い騎士と商人に扮して出立する。

アイルランドにたどり着いたトリスタンは、恐るべき竜が国中を荒らし回っていること、「この怪物を退治したかたには、黄金の髪のイズーさまをご褒美におあげになると」(同、43頁)王が布令を発していることを知る。恐れを知らぬ若者は敢然と怪物に挑戦し、苦戦の末にこれを斃す。勝利の証拠に「舌を切り取ると脚衣の中におさめた」(同、44頁)ものの、舌から滴る毒汗が全身にまわったため、沼地の近くで昏倒してしまう。一方、かねてイズーに恋慕していた、臆病者の宮廷執事[宮廷長]もまた怪物退治に乗り出し、斃れていた竜を発見すると、その首を切り取って王の前に持ち帰り、約束の美しい賞与を要求する。王はこの男の勇気を信用せず、三日後に要求の当否を査定すべく集まるよう家臣たちに命じた。

金髪のイズーは、忠実な僕のペリニスと侍女ブランガンを伴って、実

地調査に乗り出し、首のない怪物の胴体と、昏倒した若者を発見した。ひそかに宮廷の婦人部屋に運び込まれた若者を、王妃は薬草で蘇生させた。さらに、二日後に宮廷長を相手に黒白をつけさせるため、金髪のイズーに風呂をしたてさせ、調じた香油を若者のからだに塗らせる。イズーは負傷者の顔の上に眼をとめて、美しい顔だと思い、心の中で空想するのであった――

「まこと、この顔が美しいほどにこの人に勇気があれば、わたしの選士は、きっと華々しく戦ってくれるであろう！」(同、47頁)

そして、看病のおかげで気力を回復し、金髪のイズーをかちえたと思ってほほえむトリスタンを見て、彼女はいぶかるが、「毒のため曇った武器の手入れをいまだに怠っているために、きっとこの人は笑ったに違いない」(同、47頁)――そう思い込んで、トリスタンの剣を改める。鞘から抜き放ってみると、剣に刃こぼれがある。疑惑にかられたイズーが、ル・モロルトの頭蓋骨から抜き取った鉄の破片をこぼれ目に合わせてみると、継ぎ目の筋も見られぬほどぴったりと合った。

逆上したイズーはトリスタンに向かって太刀をふりかざす。トリスタンは、イズーが二度にわたって自分の命を救ってくれたこと、ここで自分の命を奪えば、あの卑怯者の宮廷長の腕に抱かれるであろうことを指摘する。さらに、「燕が平和と愛をことづててよこした」(同、50頁)金髪を見てほしいと言う。イズーは黄金の髪の毛を見たあと、しばらく黙っていたが、やがて客人の唇の上にくちづけした。「これは仲直りのしるしである」と、ベディエは注する(同、50頁)。

決着をつける諸侯の集まりの日、宮廷長に異論を唱える者の生命の安全を保証するとの約束を、イズーは父王から取りつけたうえで、正装したトリスタンと百人の騎士を導き入れる。そして、トリスタンは竜の舌を見せて、宮廷長の虚言を暴き、我こそがイズーをかちえたと言ったあと、そのイズーをコーンウォール王マルクの妃に迎え、両国に「愛と平和をもたらす」所存であると述べる。居並ぶ一同はこの提案を歓迎し

た。ただし、例外はいた――

黄金の髪のエズーはこのとき屈辱と胸苦しさに身をふるわせた。トリスタンはいったん自分をかちうると、もう、棄ててしまったのだ！黄金の髪のお話もひっきょうつくりごとにすぎなかったのだ、彼は他人にもう自分を引きわたした！……けれど、王はエズーの右手をとって、トリスタンの右手に握らせた。トリスタンはコーンウォールの王の名においてその手をとった。(同、54～55頁)

ベディエはその「編者ノート」の中で、「第2章と3章はアイルハルト・フォン・オベルクに従って取り扱った」と述べている。後述のとおり、基本的にはそのようではあるが、例のパッチワーク好みというか改変癖がそここしかに幅を利かさずにはいない。例えば、アイルランド王国はコーンウォール王国から、「初年には300リーヴルの銅を、二年目には300リーヴルの純銀を、三年目には300リーヴルの金を、徴発することができる」（ベディエ、24頁）としているが、このような明細はアイルハルトには見当たらず、ゴットフリートによるものだ（ゴットフリート、103頁）。ただし、この貢物の義務履行を怠った懲罰的な人質について、ベディエは「15の年の少年少女おのおの300人」（ベディエ、25頁）とするが、ゴットフリートは「女の子ではなく男の子」30人と控えめであった。一方、アイルハルトによれば、ル・モロルトは「この15年間に生まれた子供三人のうち一人」を要求し、「もし [マルク王が] 引き渡すのが不服であれば／早速わしがじきじき出向いて、／貧富を問わず、／聖職にあらうとなかろうと、／女の子たちと男の子たちを／捕まえてやろうぞ。／男の子たちはわしの奴隷になる定め、／お嬢さんがたは／淫売屋にぶち込んで、／朝から晩まで／このわしのために／たっぷり金を／かせいでもらうのだ」（アイルハルト、431～42行）と凄むのであった。アイルハルトに抛ろうとしなかったのは、おそらく「淫売屋」云々が気に入らなかったのではあるまいか。ただし、ベディエといえども、拉致される娘たちの運命を知悉していたからこそ、

「いとしい娘たちよ、そちらを人の慰みものにするために、そちらを育てはしなかった」（ベディエ、26頁）との嘆きを発せしめてはいる。

武骨なアイルハルトは、しかし、簡単にトリスタンの挑戦を実現させない。まずトリスタンは、ゴヴェルナルの助言に従って、マルク王に騎士叙任を懇願する（ゴットフリートの物語では、トリスタンの騎士叙任がとうに実現していたことは、前述のとおり）。時期尚早だとして洩るマルク王に叙任してもらったあとで、ル・モロルトの挑戦者として名乗りをあげ、かつこの段階でようやく自分の素性をマルク王に告げるのであった。頼もしい若者が妹の息子であることを知って、マルク王は喜ぶが、甥の危険な挑戦には断固反対する。長い激しい応酬の果てに、彼は不承不承これを認め、みずから甥の武装を手伝ってやる。この若い戦士が決闘場に選ばれた島に着くが、ル・モロルトはすでに先着していた——「不敵の英雄、トリスタンは、／自分の小舟をしっかりと岸に繋ぎ、／かつおのれの槍で砂から遠く／ル・モロルトの舟を押しのかけた」（アイルハルト、794～97行）。生きて帰れる者は一人だから、一つの舟で事足りるという理屈であることに変わりはないが、ゴットフリートは——そして、アイルハルトに拠ると称するベディエも——、トリスタンが押し流したのは、ル・モロルトの小舟ではなく、彼自身の小舟だとしている（『サガ』には、このくだりなし）。どことなく宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘を想起させる場面であるが、挑戦者の自信をアピールするには、自分のではなく相手の小舟を押し流すほうが自然であろう。

実はこのあと、熊谷直実と平敦盛を想起させるようなやりとりがあって、若者の勇気を愛で、命を奪うに忍びないとして、翻意を促すル・モロルトとトリスタンのやりとりが、アイルハルトにもまたゴットフリートにもある。ベディエの物語では、ひたすら傲慢倨傲な言動に終始するル・モロルトの、花も実もある心根がうかがえる印象的な場面であるが、残念ながら完全に削除されている。

決闘場面について言えば、トリスタンに深手を負わせた、毒の仕込まれた武器は、アイルハルトは「猪槍」（869行）だと記し、ベディエも

それにならっている。ゴットフリートは、「毒を塗られた致命的な剣」であり、その毒から救い出せるのは「ただ一人、アイルランド王妃であるわたしの妹イゾルデだけだ」（11頁）と、ル・モロルトに言わせている（後述のように、トリスタンがアイルランドに向けて旅立つことの、これは伏線となる）。これに対し、アイルハルトは、作中人物の口からではなく、本文の中で、王妃ではなく王の娘のイザルデこそが「王国の誰よりも／医術に通暁していた」（954～55行）、「この世に、もし彼女が同意すればの話だが／毒に冒された傷を治せるのは、／イザルデ以外にひとりもいなかった」（1018～20行）、「彼女はおよそこの国にいる／最高の名医と見なされていた」（1046～47行）と繰り返し述べている。ちなみにベディエは、「このひと [黄金の髪のエズー] のみ、その秘薬のたくみな術でもって、トリスタンを癒すことができるのであった」（34頁）と、これはアイルハルトに拠っている。

ところで、アイルハルトによれば、トリスタンが地上にとどまるよりは海に流されるのは、傷の悪臭のため人々の響きをかうのみならず、治癒がまったく望めないために、いっそ海上で果てたいと願ったためであるが、一方で生還の可能性に絶望しているわけではない。ゴヴェルナルに後事を託す遺言の中で、生還の可能性にすら言及している——「もし命を全うすれば、／そなたのそばに戻ってくる／年末までには、／ぜひ信じてもらいたい」（1109～12行）。彼は吊り籠の中に、豎琴と剣だけを入れるように命じた（ベディエは豎琴のみ）。船出の様子は、ベディエによれば、「櫂もなく、帆もない小舟に王はトリスタンのからだを運んだ」（32頁）そうだが、アイルハルトによればすこし違う——「このような状態で、衰れな病人は／成り行きまかせ、舵なしで乗り出した」（1152～53行）。どういう訳で、「舵なし」が「櫂もなく、帆もない」に変わったのか、知る由もないが、そのこと自体はそれほど重要ではあるまい。肝心なことは、この世での治癒が絶望的な者も、そこにたどり着けば治癒の可能性のある異界への、これは旅立ちであったということである。

ケルト語文化圏では、現実世界の外縁にあって、しばしば水で隔てられた異界の存在が信じられていた。それは、不意の訪問者の問いかけによる甦りを待つ——そして、甦りの期待は常に挫折する——、死者の世界の場合もある。その典型的な例が、あの海底に沈んだ町、イスをめぐる伝説である。深い森にあって川で隔てられた館、グラアルや聖槍の行列を無知な若者が空しく眺める館の場面も、その系列に属するものであろう（クレチアン・ド・トロワ『ペルスヴァル』）。他方、同じく水で隔てられた異界でも、現実世界から逃避する、あるいはこれに見切りをつけた者が移り住む異界、現実世界で重傷を負った者が奇跡的な治癒を求めて移り住む異界もある。その最も有名な例は、姉との近親相姦の結実、モルドレットの剣で深手を負ったアーサー王が移り住み、奇跡的な治癒と再出現が信じられた、あのアヴァロン島である。おそらくトリスタンがそこに漂着することを期待したのは、後者のような異界であつたろう。そこに無事漂着できるかどうかは運天任せ、人為の到底及ぶところではない。舵であろうと、櫂あるいは帆であろうと、舟を操る道具は無益無用なのであつた。ちなみに、ゴットフリートの物語では、ル・モロルトの妹のアイルランド王妃が奇跡的な治療能力の持ち主であることを、トリスタンは聞き知っているから、彼の船出は初めから——余人には秘密であるが——、アイルランドを目指すものであり、彼自身の持ち物は豎琴のみであるにせよ、帆船には小舟のほかに、「飲み物や食べ物やその他航海に必要なものをどっさり積み込んだ」（123頁）。なるほど合目的ではあるが、この旅立ちにはケルトの神秘性が欠如している。この点では、ベディエが基本的にアイルハルトの物語を踏襲したのは慶賀すべきことであつた。（未完）

偶然アイルランドに漂着したアイルハルトのトリスタンは、イギリスの旅芸人あがりの商人プロだと名乗り、（絶筆）

4) 物語のあらすじ

竜退治に成功したトリスタンは、アイルランド王女、金髪のイズーを伯父のコーンウォール王マルクの妻にもらい受ける。しかし、帰りの船上でふたりは誤って、齢の違う新婚夫婦用に調合された媚薬酒を飲んで恋に落ちる。コーンウォール到着後も、恋人たちは危険な逢い引きをやめることができない。

ベルールの物語は、マルク王が見張る松の木の下での逢い引きの挿話に始まる。その場は切り抜けたものの、やがて小人の仕組んだ罠にはまり、恋人たちは逮捕され、火刑の判決を下されるが、モロワの森に逃げこんだ。夏の朝、眠る姿を王に見られるが、間に置いた抜き身の剣（通常は純潔の象徴）のおかげで助かる。媚薬酒の期限がきて盲目の愛から覚醒すると、隠者オグランの仲介で、トリスタンは王妃を伯父に返す。国外追放処分の彼はひそかに残留、人足に扮してイズーを運ぶ。そのため「浅瀬の向こうに運んでくれた癩病み、／それに我が夫のマルク以外に、／いかなる男も我が股の間に入ったことなし」と、イズーは神明裁判の誓いを立てることができた。トリスタンによる悪人たちへの復讐以後、ベルールの物語は伝わらない。

トマの物語は、モロワの森から帰還したあと、果樹園での逢い引きが露見して別れる挿話に始まる。ブルターニュに移り、親友カエルダンの妹、白い手のイズーと名前に牽かれて結婚するが、これは肉体関係をともなわない。金髪のイズーへの断ち切れぬ思いを、等身大の彫像を眺めることでまぎらす。またしても戦いで、敵の武器に塗った毒で重傷を負う。治せるのは金髪のイズーあるのみ。連れてくるようにカエルダンに頼むが、密談を白い手のイズーに聞かれてしまう。ロンドンに渡ったカエルダンは使命に成功するが、風で入港を妨げられている間、白い手のイズーが「帆は真っ黒ですわ」と偽り、落胆したトリスタンは絶命。上陸後、訃報に接した金髪のイズーは、恋人の後を追うようにして死ぬ。

5) 参考文献及び作者のプロフィール

参考文献

研究：

佐藤輝夫『トリスタン伝説』中央公論社、1981

新倉俊一『ヨーロッパ中世人の世界』ちくま学芸文庫、1998

新倉俊一『フランス中世断章』岩波書店、1993

翻訳：

ベルール／新倉訳『トリスタン物語』

トマ／新倉訳『トリスタン物語』

新倉訳『トリスタンもの短篇』

(いずれも新倉・神沢・天沢『フランス中世文学集1』白水社、1990に所収)

ベディエ／佐藤輝夫訳『トリスタン・イズー物語』岩波文庫、1953

プロフィール

ベルール

いわゆる《俗伝本（流布本）》系統を代表する『トリスタン物語』の作者。粗削りながら、劇的な興奮を盛り上げる語り手。おそらくノルマンディ出身、イギリスの仏・英バイリンガルの聴衆に向けて書いたらしい（媚薬酒を、lovendrins,lovendrانتとも呼ぶ）。制作時期は、1165-1170年説と1190年代説とがある。記述内容の矛盾、語彙と文体の変化、気質の相違から、2751（あるいは2765）行以前と以後とは、作者が違うとする説もあり。

トマ

いわゆる《宮廷本（騎士道物語本）》系統を代表する『トリスタン物語』の作者。繊細な恋愛心理の分析と技巧的な文体で抜群の語り手。おそらく大陸生まれだが、作中にあるロンドンへの讃辞から察するに、プランタジネット王家のヘンリー二世の宮廷に仕えたいらしい。

制作時期は、1172-76年が通説。残された作品はベールよりさらに断片的だが、近年、船上で媚薬酒を飲んだくだりの写本の一部が偶然発見され、大いに話題となった。

6) 付記

『『トリスタン』を読む』は本来岩波セミナー・ブックスのために書き下ろされた原稿で、1992年10月26日、11月2日、9日、16日の4回にわたりに行われた岩波市民セミナーがもとになっている。

全体の4分の1が完成原稿としてすでに岩波書店編集部に預けてあったが、フロッピーに残る記録は第2章前半までで終わっている。

以下は全体の構想についての筆者のメモ（1995年3月）である。

（新倉朗子）

☆『トリスタン物語』には決定版テキストなるものは存在しない。そこで、現在最も入手しやすく、人口に膾炙したベディエ編『トリスタン・イーズ物語』（岩波文庫）を案内役として、話を進める。この19世紀的“再建本”の問題点は、それが問われる重要エピソードの分析の過程で明らかにされる。

☆発端は中世にあるから、所謂“流布本（俗本）系統”と“騎士道本系統”の物語群について、概略的な説明をする。

☆岩波文庫を案内役とするにしても、（中略）本文だけで読者をトリスタンの世界に導き入れるために、“トリスタン伝記”に即した叙述が無難であろうか。すなわち、

- (1) 第一期：トリスタンの出生と幼少期（ベディエの1章）。
- (2) 第二期：トリスタンと、アイルランド王女、金髪のイーズとの結縁、とりわけ、「媚薬」のエピソード（ベディエの2～4章）。
- (3) 第三期：見張られた逢い引きと逃亡および社会復帰、とりわけ、「大松」、「抜身の剣」、「神明裁判」のエピソード（ベディエの6～12章）。

- (4) 第四期：恋人たちの別離と死、とりわけ、「白い手のイズー」、
「恋人たちの最期」のエピソード（ベディエの14～19章）。

☆所謂宮廷風騎士道物語的恋愛が支配的であった時代コンテクストにおいて、トリスタンとイズーの情熱恋愛の特異性と与えた衝撃、そして後代のヨーロッパへの影響。

☆近代にトリスタン神話を復活させたワグナー作品との対比検討

☆プラトニック・ラブではなく、性愛に力点を与えた神話であるにしても、性的描写をほとんど決定的に欠く物語が、なぜ現代にあっても若い人々にアピールするのか。プルーストが特にその一人であった、幸福感もしくは幸福の追求のテーマを論じる。